

飲酒運転事故を起こした 加害者の家族として

主婦 女性 50代

夫の飲酒運転事故は私や子ども
の人生に大きく影響をもたら
しました。酔いつぶれて帰っ
てきた翌朝、車があることにし
しばびっくりしながらも、運
転できるぐらいの量だったんだ
と安堵していた日々。夫の酒が
どくなつた頃、毎日のように
繰り返す飲酒運転のことで、喧
嘩は絶えませんでした。救急車
のサイレンが深夜に鳴り響くと
夫が事故で怪我したのでは…と、
真つ先にそのことを思い、その
次によぎることが他人に怪我を
させたのでは…と帰ってくるま
で不安で眠れないことも度々で
した。

一番避けたかった出来事が現
実になった日。事故現場で、酒

が残ったしまりのない顔でた
ずんでいる夫の惨めな姿に、つ
いに起ってしまったという怒り
と情けなさでいっぱいでした。
命に問題はないと聞かされ安心
したもの、愚かな行為の結末
を受け止めるにはあまりにも残
酷な結果でした。

救急室で被害者の姿を目の当
たりにした私は平常心を失い、
我を忘れ被害者の横たわるベッ
ドの脇で、青白く冷たくなった
足を必死にさすりながら「ごめ
んなさい…ごめんなさい…」と
恐怖でいっぱいになり泣きなが
ら言い続けていました。これま
で、飲酒運転で怪我をしたら困
ると、夫の安否だけを考えてい
た自分の愚かさを恥じ、見ず知

らずの人に一生消えることのな
い傷を負わせたことへの罪悪感
を持ち続けて生きる辛さを知り
ました。そして飲酒運転の代償
の重さを…家族が受ける地獄の
ような生活の始まりでもありま
した。

夫は事故後、ショックで更に
飲酒量が増え、1カ月も経たな
い内に精神病院でアルコール依
存症と診断されました。事故の
後始末や夫がやるべき問題を私
が解決に奔走するようになった
頃、目の前のあらゆることが自
分の責任となつてのしかかり、
被害者に対して「もっと何かし
なければ…」と負い目を感じ、
要求されるままに見舞金をかき
集め支払いました。被害者が苦
しい入院生活を送っていると思
うと「幸せになつてはいけない」
という罪を自分に課していった
のです。

自分のために何かしてはいけ
ない。楽しんではいけない。の
んきに休んではいけない…と。

苦しみながら生きて当然だと思
う日々の中で、親のだらしない
姿を子どもたちに見せ続けまし
た。子どもたちは、酒を止めき
れない父親に振り回され、お金
の工面に愚痴を言いながら走る
不安定な母親に耐えながら生き
ていたと思います。

数年後、夫は断酒会という自
助グループに参加したことで自
らの過去を振り返り、罪を認め、
酒を止め続けることができまし
た。これまでの体験を通して、
アルコール問題は家族ぐるみの
病気であり、世代間連鎖するこ
とを学びました。何よりも被害
者の幸せを願うこと、傷つけた
子どもたちのために唯一の償い
としてできることは、アルコー
ルの知識の啓発、アルコール依
存症の予防。また、アルコール
問題で悩んでいる本人や家族の
被害相談や治療に結びつけるネ
ットワークを充実させることだ
と感じています。